

第2研究班 「継続看護における連携システムの構造」研究班の紹介

著者	富川 孝子
雑誌名	看護研究交流センター事業活動・研究報告書
巻	14
ページ	23-24
発行年	2003-06
その他のタイトル	Building Cooperation Systems in Continuous Nursing : An Introduction of the Research Groups
URL	http://hdl.handle.net/10631/225

第2研究班

「継続看護における連携システムの構築」研究班の紹介

研究班代表者 富川孝子
新潟県立看護大学（精神看護学）

Building Cooperation Systems in Continuous Nursing :
An Introduction of the Research Groups
Takako Tomikawa
Niigata College of Nursing

研究班の目的

近年、「継続看護」という言葉は、ケアネットワークや地域ケアシステムの構築の意味で使われるようになった。その背景には、慢性疾患や障害をかかえた在宅療養者の増加がある。このような人々にとっての健康とは、病気との関連だけではなく、よりよく生きることとの関連で捉えることが重要になる。よりよい生活を営むこと、いきいきと生きること、その人なりに納得でき、満足できる人生を送ることを実現するには、保健・医療・福祉の連携が不可欠である。本研究班では、さまざまな健康問題をかかえる人々とその家族を対象として、保健・医療・福祉の連携に関する現状の問題点、保健・医療・福祉の連携に必要な条件等を明らかにすることを目的としている。

研究グループと研究内容の紹介

本研究班は以下の5つの研究グループから構成されている。各グループの研究題目と研究内容を紹介する。

（1）加藤光寶（研究代表者）グループ

共同研究者 直成洋子，酒井禎子，西脇洋子，山元智穂，本宮みどり，牧 優子，
小野塚栄子，岡田恵子，渡辺初美，熊木留美

題目1：「在宅療養」「在宅ケア」に関する文献レビューから見た在宅療養支援のための課題

1997年1月から2002年10月までの5年間の文献をレビューした結果、患者・家族が在宅療養を実現・継続していくには、5つの条件〈患者・家族の在宅療養への意思〉〈継続的な医療・看護支援と緊急時の物的・人的サポートシステムの整備〉〈在宅生活を支える社会資源の効果的な活用〉〈在宅での生活のイメージ化と個別性を考慮した介護の知識・技術の具体的な指導〉〈早期から多角的に問題をとらえチームで関わっていくこと〉の必要性が示唆された。

題目2：県内病院の一病棟を退院した患者の実態調査

県内中規模病院の一病棟を退院した患者 700 名の在院日数、退院時の状況、家族背景と社会的サポート体制を診療記録から調査した結果、在宅療養への移行と継続を支えるためには、患者・家族のセルフケア能力を高めるための入院後早期からの指導、在宅療養に必要な社会資源のアセスメント、在宅ターミナル患者のサポートシステムの確立が重要であると示唆された。

(2) 田中キミ子 (研究代表者) グループ

共同研究者 北川公子, 柏木夕香, 宮島ひろ子

題目: 療養病棟患者の退院後の在宅ケアを効果的に継続させるための退院指導に関する研究

県内の一療養型病床群を退院した 65 歳以上の在宅療養者 21 名を対象として、退院時指導の内容を記憶し、実際に在宅で実施しているか否かを外来受診時または訪問により面接調査した結果、退院時指導を行った看護師側と指導を受けた患者・家族側との間には大きなズレがあり、疾病や回復過程の違い、介護者の特性などを考慮した退院時指導の必要性が明らかになった。現在、調査結果をもとに作成したパンフレットを用いて退院時指導を実施中である。

(3) 富川孝子 (研究代表者) グループ

共同研究者 俊成晴奈, 丸田明美, 清水美和子, 小林朗子, 山岸裕子

題目: 新潟県における精神障害者ホームヘルプサービスに関する研究

県内市町村における精神障害者ホームヘルプサービスの実施状況、試行的事業に関するシンポジウム報告、サービス利用の事例報告をもとに、県内の精神障害者ホームヘルプサービスの実態を把握した。平成 14 年度は 111 市町村中、54 市町村で実施された。長岡市で実施された試行的事業では、サービスの効果の確認とともに、ホームヘルパーの支援が重要であることが確認された。また、事例を通して、医学モデルから生活モデルへの転換の必要性が確認された。

(4) 加固正子 (研究代表者) グループ

共同研究者 大久保明子, 金井幸子

題目: 救急外来看護師が感じている小児看護の課題

県内某病院の救急外来を担当する看護師 9 名を対象として、「救急外来で小児を対象にしている困っていること」について半構造的質問紙を用いて面接聞き取り調査を行った結果、[医療体制] [看護師独自の問題] [親 (保護者)] に関連した 3 カテゴリーが抽出された。[看護師独自の問題] に属する 6 サブカテゴリー <労働内容の複雑さ・多さ> <親への対応の難しさ> <小児看護の経験不足> <看護師の判断と責任の重さ> <電話対応の難しさ> <医師と親との板挟み> の改善が小児救急医療サービスの向上と密接に関連しているとの示唆が得られた。

(5) 中川 泉 (研究代表者) グループ

共同研究者 朝倉京子, 大友優子, 中島喜恵子

題目: 未提出